

とを期待します。人生はさりげない程難しいといえます。水は無味無臭で毎日飲むことができる。米は淡白であればこそ常食となる。水は全ての生物に生命を与え、大地を潤し、一滴一滴の水が大河となる。米は幾先年の古来から人間の糧として人命を支えてきた。農業は未来永遠に続く開拓者の天職と心得ます。

晩年という下り坂をトボトボと歩くのではなく、頂上を見

昭和二十七年に入植

昭和二十七年二月六日、一年中で一番寒い時期、大雪の降る中夜汽車にゆられて今は亡き柴田さんと叔母と姉と一緒に守谷の駅に着いたのは、たしかお昼過ぎだったと思います。

あの当時はバスの便とてなく歩くことが当り前の時代でした。着いた日は雪こそ降らないが、ものすごい風。進む方向から吹いてくる風に息も止まりそうで、話かけるにも大変。叔母と姉は不安気に私の顔を見る。あの人のいい柴田さんが私達に気を使って黙って歩き続ける。滝下の渡舟場に着いた時、姉と叔母が顔を見合わせて言葉も出ない様子。私はしらぬ顔で柴田さんの顔を見たら何も言わずにじっと私の顔を見ていた。なんだか気の毒になり、思わず「風流だな——」と言ったら、黙って笑みを浮かべたのを思い出します。

上げて登って行く果てに死があるとか、正直なところ長患いもせず苦しまずコロッと逝きたいなあと妻と話をする今日この頃。年のせいかなあ…… 人生八十年とか、まだ先は長い。若い気持で節制な生活をと分かってはいてもなかなか難しいが、お陰様で健康に恵まれ酪農に精出している毎日です。

平成八年一月六日記

庄司 キン子

あの日は旧暦の年越しでした。皆さんに迎えられ柴田さんの六畳一間の部屋に小さな火鉢があり、木の小枝を燃して休ませていただきました。

姉達は何も言わずに顔を見合わせているばかり。私は多少の覚悟はしてきたものの不安がないと言ったらうそになりませぬ。正直なところ心細くて仕方ありませんでした。叔母と姉の不安な気持を掻き立てるように外の松の枝にうなり声たてて吹きまくる北風。あの時の姉達の落ち着かない様子が今でも頭の中に浮かんできます。

夜半に風も去り、朝起きたら昨日の風がうそのような良いお天気でした。朝食をいただいてから高橋政吉さんの馬車に乗せてもらって組合長宅まで挨拶に行き、最初に言われた言

葉は「荷物はほどかずに、だめだと思ったらぐずぐずせず
帰るんだよ」で、笑いながら言われたことが懐かしく思い出
されます。

旧のお正月で三箇日は休みだったと思います。姉達も帰る
時は、風もなく、山形では想像もつかないとても暖かな良い
お天気でしたので、一安心した様子でした。

さあ、いよいよこれから私も皆さんと頑張っ
て行こう。共同生活の経験は終戦から引揚げまでの間いやという程味わ
てきましたから、少々のことではへこたれないぞと自分に言
い聞かせ頑張ってきました。

正直今思えば共同生活の頃が懐かしく連想されます。
炊事当番以外、時間までゆっくりと寝られたし、仕事の面
で辛いこともあったが、楽しくもあった。農作業をさぼり、
日だまりで日向ぼっこしながら肩を寄せあい、語りあい、時

入植五十年を思う

私の二十代は大東亜戦争時代である。

昭和十五年三月青森県弘前陸軍病院に召集されて、三回目
の召集で中国山西省に派遣され、昭和二十一年三月復員して
故郷山形県最上郡真室川町安久土二〇九五の実家に帰る。

終戦後の国内は何処も食糧不足であった。私の大八洲に入

の経つのも忘れて帰ってきて鈴木さんに叱られたこともあ
った。今はあの頃が懐かしくて心がなごみます。

昭和三十一年に共同生活から個人生活になり、皆さん一生
懸命頑張りました。頑張ったの一言です。

いろんな出来事もありました。困った時はお互いに助け合
い協力して頑張ってきました。日本の国も豊かになり大八洲
組合も豊かになりました。この先どんな時代が待っているこ
とやら。

一生の間に多くの人々と出会い、そして別れ、ともに苦楽
を分け合って暮らしてきた人達との出会いこそ切っても切れ
ない縁で結ばれていたものと思います。このめぐり合わせに
感謝し、これから先も続くかぎり頑張っていきたいと思いま
す。

杉原 勝見

植したのはこんな世の中の背景があったことを想起する。

昭和二十年八月十五日終戦の昭和天皇の御言葉を支の嘉
定師団指令部で聞いたが、堪え難きを堪え、忍び難きを忍び
だけが聞こえて、後は分からなかったことを想い出す。昭和
二十一年三月復員後は故郷真室川で約半年、実家を主に親戚